

相模国調邸の「郡司代」「主帳代」に関する考察

山下 剛司

〔抄録〕

本稿では先行研究ではあまり取り上げられることの無かった「郡司代」「主帳代」という職について注目し、天平勝宝年間平城京の左京八条三坊に存在した相模国調邸の土地売買に関する文書から何故その様な職が設けられたのかを考察する。相模国調邸はその名の示すとおり、相模国から運京されてきた調を取り扱う施設である。調は平城京まで運搬しやすいように、相模国で現物から軽貨に代えられ、都で再び現物へと交換された。この実務を担当

っていたのが国司や郡司ではなく、他の国では見られない「郡司代」「主帳代」という職に就いていた者達であった。そこで、相模国とその調の特色を見ることによって、「郡司代」「主帳代」が置かれた理由を考察する。

キーワード 相模国調邸・郡司代・主帳代・商布・漆部伊波

はじめに

平城京はその中央を南北に朱雀大路が走り、それにより左京と右京に分けられていた。また、朱雀大路から見て東側を左京、西側を右京とし、左右京それぞれに市を設け官人百姓達が衣食を調達するためには欠かせない場所となっていた。その左右の市には市司という官司が置かれ、東市司なら東市をと言う具合にそれぞれの地を管理していた。

その東市の西側には堀川が通されていて、市に隣接していることから、物資を搬入するための運河とその荷揚げ場として用いられていた。その場所には相模国調邸とう施設があり、土地売買に関する文書が数点現存している。

相模国調邸が置かれていた土地は、その利便性から天平勝宝八年に造東大寺司に売却された。この事柄に関する研究は戦前から存在し、平城京研究の一端として取り扱われていた。高柳光寿氏は、調邸は国

衙調所の出張所とし、調邸売却の手順や売却の理由となった堀川の位置について考察した。狩野久氏は、調邸は調物の取扱所であるとし、村尾次郎氏^③は、京進調物の保管倉庫であるとした。また、栄原永遠男氏^④は、調庸制が動揺し、京と地方との流通経済の発展から交易制が発達し、その交易制の担い手たちは郡司や富豪の輩と呼ばれる人々で、その一例として商布と調邸を取り上げた。

これらの研究は、「相模国の調邸とは何か。」「それはどのような機能を有していたのか。」を究明しようとするためのものであった。

しかし、土地売却に際して相模国側の代表として署名していることから考えても、調邸を実質運営・管理していたのであろう「郡司代」・「主帳代」という官職については言及されていない。

そこで、本稿は相模国調邸の「郡司代」「主帳代」という見慣れない官職名を有した人物達に焦点を当て、何故その様な他では見られることのない官職が相模国調邸において用いられたのかを考察する。

相模国調邸の運営者

この節では相模国調邸を実質運営していた人物達について考察する。まず、左に挙げた文書を見てみる。

『寧楽遺文』諸国田券（早稲田大学図書館所蔵文書）

相模国朝集使解 申売買地事

調邸壹町在左京八条三坊者得價錢陸拾貫文

右、得件錢價、売與造東大寺司既畢、但捺印文者、追將申送、

仍録事状、以解、

天平勝宝八歳二月六日雜掌足上郡主帳代丈部「人上」

鎌倉郡司代外従八位上勳十等君子「伊勢万呂」

御浦郡司代大田部直「圀成」

国司史生正八位下茨田連「蔭毛智」

「司検

長官佐伯宿禰「今毛人」 主典 葛井連「根道」

この文書は、調邸の存在した左京八条三坊の土地売買に関するものであるが、ここで注目したいのは相模国側の代表として連署している人物たちの役職である。

雜掌足上郡主張代丈部「人上」

鎌倉郡司代外従八位上勳十等君子「伊勢万呂」

御浦郡司代大田部直「圀成」

国司史生正八位下茨田連「蔭毛智」

右記の四人が署名を加えている。その中に「足上郡主帳代」・「鎌倉郡司代」・「御浦郡司代」という見慣れない官職名が記されているのが見える。

これら足上郡・鎌倉郡・御浦郡は共に相模国内の郡であり、この地名を頂く郡司が署名すること自体には何の問題も無い。疑問なのは郡名の後につけられている官職に「代」がつけられていることである。

そこで、「代」を『大漢和辞典』（大修館・一九五五）で検索すると、以下の様な意味が記されている。

- ①かはる。かへる。
- ②かはるがはる。
- ③かはり。かはる者。
- ④よ。世。
- ⑤よよ。だいたい。
- ⑥血脈が結滞すること。
- ⑦國の名。
- ⑧姓。

ここでは、③の意味を用いて、「郡司のかはり」・「郡司にかはる者」として、郡司代・主帳代の意味を捉えておきたい。あくまでも彼らは、郡司の代わりとして、その職務を勤めている者達という認識で間違いないように思われる。

調邸はその名の通り、調を扱う邸である。調とは、諸物産を朝廷に貢進する税の一種で、調・調の代納物としての調雑物・付加税としての調副物があった。調は絹・絶・糸・綿・麻布、雑物は鉄・鉄・塩・海水産物、副物は主として手工業原料・手工芸品（染料、油脂、漆や簀・樽など）であった。調の納められるべき予定量は、人口と課口の集計帳簿である大帳であらかじめ民部省に掌握されていて、朝廷の財政の基盤とされた。貢調使が調帳とともに調を大蔵省に貢進し、主計

寮の監査を受けてはじめて、調はその産出された国から朝廷に無事納められたことになるのである。

調を集めるのは郡司の職務であり、それを運京するのは四度使となつた国司の勤めである。調邸では税を取り扱うわけであるから、在京の百姓を雇うわけにはいかず、皆相模国の関係者で行われていた。その中でも、国司はその職掌上、任国と都を行き来しつつ、任国の政治を執らなければならない。そこで、国司の中からは調邸専従という人員を割けることが出来なかった。また、郡司にしても正員郡司には任免された郡内での政治が大変繁務であり、これも任地を離れることが出来ない。

国司・郡司共に既存の人数では対応することが出来ないのであれば、調邸専用に人数を増やしてはどうだろうか。しかし、国司・郡司の員数は令によって厳格に規定されており、容易に人数を増減させることは不可能であった。

ここで一度、郡司の任官までの考查の様子を見てみる。『延喜式』太政官式任郡司条には、

「凡諸国銓擬言上郡司大少領者。式部対試造簿。先申大臣即奏聞。貳式部書位記請印。其後於太政官。式部先授位記。次唱任人名。如除目儀。事見。儀式。」

とある。つまり、

国司による郡司候補者の選出(国擬)を行い、これを経ると擬郡司となる。

都に上り、式部省において審査を受ける。

太政官・天皇への報告(郡司読奏)。

任官の儀式(郡司召)を経て、正員郡司に就任する。

このように郡司に就任するには、複雑な段階を経る必要がある。また、郡司には定員が規定されていて、公務が煩雑だからというような理由でその人数を増員することはできなかった。

また、擬郡司に関しても、米田雄介氏の研究によると、正員郡司と並存する例や一つのポストに複数の擬郡司が置かれている例が見られない点、擬少領の中には無位者が見られる点などが指摘されている。これは、八世紀の擬郡司は正員郡司に欠員が生じた場合に、後任として置かれた一時的な存在であり、原則としてその人物は中央で所定の手続きを済ませれば正員郡司に任命される郡司認定予定者であった。つまり、八世紀においては擬郡司という肩書きで公務に就くことはできなかったのである。

この、郡司の就任に際しては明らかに他の地方官とは異なる選考法を用いていることが分る。これは、大和政権時代にまで遡る様式であり、大和に対し他の在地首長たちが大和の大王に服属し、その見返りとして今まで治めていた土地を郡司という役職に付くことで安堵されるのである。そこに存在するのは律令制以前からの大和の大王と在地首長との契約であり、大王の支配を受け入れる代わりに、在地首長の

権威はそれ以前と同様に認められたのである。もちろん、大王の支配を受け入れるわけであるから、実質の人質として、また、律令制下においても郡司はその子弟を兵衛に、その姉妹娘を采女として大和の大王、都の天皇に差し出さなければいけなかったのである。

以上のように、郡司就任には実に複雑な試験が重ねられており、また、就任後も子弟や一族の女性を朝廷に出仕させなければならない等、他の官職には存在しない義務が付随してくるのであり、これもまた安易に員数を増減するようなことはできない。

そこで、相模国調邸では国司でも郡司でもない役職を創造するという方法を用いたのである。先ほど述べてきたように、相模国から都へと運ばれた税を取り扱う大変に重要な業務である。

おいそれと都の住人を雇うことも出来ず、地元の間人なら誰でも良いということにもならない。

そこで考え出されたのが、先の文書で判を加えている、珍しい肩書きを持った連中である。

では、調邸において職務に当たっていた郡司代と主張代とは、どのような人物が任命されていたのだろうか。

彼らの一族を調べてみると、

天平十年駿河国正税張「相模国餘綾団大穀大初位下丈小山」

薬師寺文書霊亀元年三月「相模国足柄上郡君子尺麻呂」

宝龜二年三月八日沙彌慈窓経師貢進文「相模国高座郡土甘郷戸主

大田部直乎多麻呂戸口矢作部廣益」

等の記載があり、郡司代に任命されている人物たちと同じ氏族名が確認できる。「丈部人上」「丈小山」・「君子伊勢万呂」「君子尺麻呂」・「大田部直圀成」「大田部直乎多麻呂」

このことから、彼らは調邸運用のために都で雇われた人物ではなく、軍団の大毅・少毅には郡司の子弟をあてるので、彼らは郡司に就くことができる、相模国に地盤を持つ郡司層の出身であることが分る。つまり、相模国が産する交易雑物を取り扱う職務であるので、同国に基盤を持つ氏族が最適であり、直に税を取り扱う職務の性格上、国司か郡司という官職に就いている者である必要があったのである。

つまり、税を扱うことから百姓にはできない仕事を行うのに、国司や正員郡司では都に留まることが出来ず、また擬郡司もそのような職務は出来ない。そこで、それらの問題を解決するために創設されたのが郡司代であった。かれらはいずれ郡司となる家柄の者であり、都に出て相模国の税制に関して実務経験を積みまた、相模国としてもいずれは地元で税の徴収管理を行う者なら、安心して調邸の運用を任すことが出来たのではないだろうか。

なぜ「相模国調邸」なのか

管見の限り、相模国調邸のような各国衙の出張所が他にも都に存在したという記事は見つけることは出来なかった。では、相模国の調邸は何故設置されたのだろうか。この問題については既に森浩一氏が論を唱えられている。つまりそれは、相模国の封戸数の多さに関係しているのである。

令の規定により、封戸物のうち調庸は全給、田租は半給となっていた。封戸物は直接封主に送られるのではなく、一旦国衙の正倉に納められ、改めて運京されるのが原則である。また、遠国から封戸物を現物のままで運搬すると、時間と労力が莫大にかかり、また、運脚の白丁に大変負担がかかる。このことから封戸物を軽貨に変えて運京していた。

『延喜式』の民部式交易雑物条によると、商布の生産は関八州が中心であり、封戸物を運京する際の軽貨は商布であったと思われる。しかし、封主には軽貨ではなく封戸物を現物で収める決まりなので、相模国で「軽貨Ⅱ商布」に変え運京し、京の市において再び封戸物に買い換えられたと考えられる。そこで、それら商布を封主に収める、現物に買い換える、という業務を担っていたのが調邸であったと考えられる。

また、相模国と同様に他の関東の国々も「軽貨Ⅱ商布」として運京していたと思われる。

そして、地理的にみて関八州のなかで一番平城京に近い相模国に商布を集め、一括して運京していたのではないだろうか。『東大寺要録』によると、漆部伊波は布二万端を寄進している。これは相模国が一年間に納める商布の約三倍の量である。この事例から漆部伊波は叙位されているのであるが、この取扱量から考えると、彼が相模国一国だけではなく他の関東の国の商布も取り扱っていたと考えられる。何故、軽貨に商布が選ばれたかは、関東におけるその生産量であろう。生産量が多く、他の軽貨よりも関東においては大量に収集しやすかったこ

とがその要因と思われる。また、生産量が多いからこそ、漆部伊波による二万端もの寄進も成りえたのである。

やういひ

本稿で述べた内容をここでまとめてみたいと思う。

封戸率の高い相模国は現物を運京する労力を軽減するために、

相模国 「封戸物↓軽貨⇐商布」
 ⇐ 運京(商布)
 都 「軽貨⇐商布↓封戸物」

という方法を用いていた。そこで、都で「商布↓封戸物」への業務を行っていたのが調邸であり、その運営者が郡司代であった。相模国の税に関する職務であるので、本来は国司がその責任者として調邸に赴任するのが望ましい。しかし、国司は任地において多種多様な業務をこなさねばならず、人員を振り分けることは出来ない。それなら、国司の定員を増やせばよいと考えるが、国司を増員するには朝廷の許可を得るなど制度的に大変難しい。また、これは郡司も同様であって、郡司の増員も不可能である。一方、擬郡司ならば国司の職権で増員が可能である。しかし、擬郡司はあくまでも郡司任官予定者なので、擬郡司という官職で公務、調邸の政務に当たらせるわけには行かない。そこで、郡司であっても正式な郡司では無く、また、擬郡司でもない新たな職務として郡司代が創設され、複雑化した調邸の政務に充てた

れたと考えられる。

また、平安期においても郡司代¹⁶⁾という職名を確認することが出来る。これら平安期に見える郡司代と比較検討することにより、さらにその職務内容が詳細に理解できるものと考ええる。これを今後の課題としたい。

〔注〕

※本文並びに註釈において、傍線を付したのは著者によるものである。

- (1) 高柳光寿『東大寺薬師院文書の研究』上・下(『日本歴史』一〇一、一〇二・一九五六)
- (2) 狩野久『日本古代の都市と農村』(『日本史研究』五九・一九六二)
- (3) 村尾次郎『律令財政史の研究』(吉川弘文館・一九六四)
- (4) 柴原永遠男『律令制下における流通経済の歴史的特質―律令制収奪と関連して―』(『日本史研究』一三一号・一九七三)
- (5) 馬淵和夫『和名類聚抄古写本声点本本文および索引』(風間書店・一九七三) 所収『元和古活字本和名類聚抄』に「相模国管八 足上 足下 餘綾 大住 愛甲 高座 鎌倉 御浦」とある。
- (6) 『養老令』賦役令調庸物条「凡調庸物。毎年八月中旬起輪。近国十月三十日。中国十一月三十日。遠国十二月三十日以前納訖。其調糸七月三十日以前輪訖。若調庸未発本国間。有身死者。其物却還。其運脚均出庸調之家。皆国司領送。不得・勾随便纒輸。」
- (7) 『養老令』職員令大郡条「大郡大領一人。〈掌。撫養所部。檢察郡事。余領准此。〉少領一人。〈掌同大領。〉主政三人。〈掌。糾判郡内。審署文案。勾稽失。察非違。余主政准此。〉主帳三人。〈掌。受事上抄。勘署文案。檢出稽失。読申公文。余主帳准此。〉」
 職員令上郡条「上郡大領一人。少領一人。主政二人。主帳二人。」
 職員令中郡条「中郡大領一人。少領一人。主政一人。主帳一人。」
 職員令下郡条「下郡大領一人。少領一人。主帳一人。」

職員令小郡条「小郡領一人。主帳一人。」

- (8) 米田雄介『郡司の研究』(法政大学出版局・一九七六) 第四章「郡司制の動揺」第一節「擬任郡司制の成立と展開」参照。

- (9) 『令義解』軍防令兵衛条「凡兵衛者。国司簡郡司子弟。(謂。郡司。少領以上也。子弟者。子孫弟姪也。) 強幹便於弓馬者。郡別一人貢之。若貢采女郡者。不在貢兵衛之例。三分一國。二分兵衛。一分采女。(謂。假令。一國有三郡者。二郡貢兵衛。一郡貢采女。若其不等者。從多貢兵衛耳。)

- (10) 矢野健一「相模国調邸の性格(前近代)」『立教日本史論集』創刊号(一九八〇) 所収。

「相模国天平七年封戸租交易帳」によると、相模国に設けられた封戸は十三処。戸数は一三〇〇戸。田数四一六二町余となっている。断簡が存在するので全ての封主はわからないが、判明しているだけで、「皇后宮食封一百戸」「一品舍人親王食封三百戸」「右大臣從二位藤原朝臣食封五十戸」「從三位山形女王食封五十戸」「從三位鈴鹿王食封五十戸」「從四位下檢前女王食封四十戸」「從四位下三嶋王食封五十戸」「從四位下高田王食封三十戸」「大官寺食封一百戸」となっている。天平二年「紀伊国正税帳」によると、紀伊国は全給が二処・半給が一処であり、封戸の田租は全体の十六%である。また、天平十年「周防国正税帳」によると、周防国の封戸田租は全体の十八%であり、相模国の封戸数が如何に多いかがわかる。また、『和名類聚抄』巻五によると、相模国の水田総数は一一二・三六町。郷数は五十七郷となっている。「相模国天平七年封戸租交易帳」の一三〇〇戸は二十六郷分に相当し、約半数を占めている。水田の四一六二町も和名抄の約半分に当たり、このことから相模国は封戸率が高いことが伺える。

- (11) 『養老令』賦役令封戸条に「凡封戸者、皆以課戸充、調庸全給、其田租為二分、一分入宮、一分給主」とある。

- (12) 『令集解』賦役令封戸条古記に「問、其租一分給主、若為処分、答、運春米国者未送、遠国者販売輕貨送給耳」とある。

(13) 『延喜式』民部式交易雜物条

駿河国 絹二百疋。商布二千一百端。端別長二丈六尺。鹿革張。樽二合。

甲斐国 商布四千一百端。履料牛皮三張。鹿皮卅張。紫草八百斤。鹿革十張。猪脂一斗。櫛子四合。

相模国 商布六千五百端。毳二石五斗。鹿皮廿張。鹿角十枚。紫草三千七百斤。布一千五百端。鞆十具。鹿革廿張。履牛皮十二枚。櫛子四合。

武蔵国 純五十疋。布一千五百端。商布一万一千一百端。毳六石五斗。竜鬚席卅枚。細貫席卅枚。細貫席卅枚。席五百枚。枚。席五百枚。履料牛皮二枚。鞆廿具。鹿革六十張。鹿皮十五張。紫草三千二百斤。木綿四百七十斤。櫛子四合。商布二千二百八十段。鹿革廿張。櫛子四合。

安房国 純五十疋。商布一万一千四百廿段。布一千五百九十端。腐革八張。鹿皮五十張。洗革一百張。鹿角十枚。鑢廿具。木綿四百七十斤。櫛子四合。

下総国 布一千五百九十端。商布一万一千五十段。鹿革廿張。鰯文草十張。紫草二千六百斤。櫛子四合。

常陸国 純一百疋。布四千端。商布一万三千端。庸布七百段。鞍橋十具。鞆廿具。履料牛皮九張。鹿皮廿張。洗革一百張。鹿角十枚。席六百枚。紫草三千八百斤。大瓢十口。櫛子四合。

信濃国 商布六千四百五十端。熟麻十斤。履牛皮三張。鹿皮九十張。洗皮十五枚。紫草二千八百斤。布一千五百端。細貫筵五十枚。円長猪脂一斗。櫛子四合。

上野国 純五十疋。布一千五百九端。商布七千七百卅一段二尺二寸八分。苧八十斤。席九百枚。細貫席六十枚。紫草二千三百斤。鹿革六十張。履料牛皮廿張。櫛子四合。

下野国 布一千四百卅六端。商布七千三段。履料牛皮七張。洗革一百張。鹿角十枚。席八百枚。砂金百五十兩。練金八十

越中国 四兩。紫草一千斤。氈十張。櫛子四合。絹百疋。商布一千二百段。履料牛皮四張。曝黑葛廿斤。編宮三百十九合。織宮廿八合。漆一石三斗。

越後国 商布一千端。漆五斗。櫛子四合。履料牛皮八枚。

- (14) 『東大寺要録』(全国書房・一九四四)所収。 ※「は史料では、改行されている意。

造寺材木知識記 材木知識五万一千五百九十人「役夫一百六十六万五千七十一人」金知識人三十七万二千七十五人「役夫五十一万四千九百二人」奉「加財物人」利波志留「米五千斛」河俣人麿「錢一千貫」物部子嶋「錢一千貫」車十二兩牛六頭「甲賀真束」錢一千貫「少田根成」錢一千貫車一兩「二百柄」陽侯真身「錢一千貫」牛一頭「田辺広」錢一千貫「板茂真鈞」錢一千貫「漆部伊波」布二万端「夜国麿」稻十万束屋十間倉五十三間「栗林二丁」家地三町「自余少財不録之。

- (15) 『続日本紀』天平二十年二月廿二日壬戌条「進知識物人等。外大初位下物部連族子嶋。外從六位下田可臣眞束。外少初位上大友國麻呂。從七位上漆部伊波並授外從五位下。」

また、同様に商布を寄進して叙位された例として、神護景雲元年三月乙亥条「常陸国新治郡大領外從六位上新治直子公、献錢二千貫。商布一千段。授外正五位下。」

宝龜八年六月乙酉条「武藏国入間郡人大伴部直赤男。以神護景雲三年。献西大寺商布一千五百段。稻七万四千束。墾田四十町。林六十町。至是其身已亡。追贈外從五位下。」

- (16) 『平安遺文』には以下の史料から、郡司代の記載を見出すことができる。

○二五八肥前国武雄社四至実検文○武雄神社文書
郡司代僧(草名)

○一七六四 肥前国武雄社使上分田貢進状○武雄神社文書
郡司代清原(花押)

○一七八八 肥前国武雄社使上分田貢進状○武雄神社文書
郡司代僧(花押)

○二二四九 紀伊国山東荘立券文案○根来要書上
長承元年十一月十六日郡司代散位秦宿禰(在判)

○二二六三 肥前国藤原種時所領去状案○石志文書
郡司代佐伯

〔参考文献〕

『新修大阪市史』(一九八八)第六章第五節第三項「漆部伊波の交易活動」
森浩一「政商・漆部伊波のこと」『アサヒグラフ』四〇七一号(二〇〇〇)所収

森浩一「平城京にあった相模国の調邸」『アサヒグラフ』四〇九七号(二〇〇〇)所収

森浩一「平城京にあった相模国の調邸」『つづき』『アサヒグラフ』四〇九七号(二〇〇〇)所収

森浩一・網野喜彦『日本史への挑戦「関東学」の創造をめざして』(大巧社・二〇〇〇)Ⅱ「関東の歴史力・商布と商旅」

〔付記〕

本稿は、「古代・中世史研究会」(佛教大学内)において発表した内容を文章化したものである。

(やました つよし)

文学研究科日本史学専攻博士後期課程
(指導教員…中井 真孝 教授)

二〇一一年九月三十日受理